

後期イヴァン・イリイチの教育批判からみた学習について

立命館大学 安田智博

本報告は、イヴァン・イリイチが1971年に出版した『脱学校の社会』で展開した脱学校論の後に、1990年代に言及した教育批判への変遷をめぐって、イリイチが教育批判へと批判の射程を広げることとなった所以を、イリイチの学習観から検討するものである。とりわけ、イリイチが「学習 Learning」について、前期から後期にかけての視点を軸として明らかにする。

イリイチによれば、近代社会の人々にとってのよい生活とは、人々と社会が豊かになるために必要だと信じる価値観に依拠した制度を通じて得られるという認識からきている。それは本来の価値に対して、「ある処置を行なうように計画された過程が、究極的にはその処置を受ける人々に彼らの望んでいた結果をもたらすという信念」をイリイチは制度化と睨んでいたのである [Illich 1971: 114]。よって、本来であれば人は豊かな生となるはずの各々の多様な価値とは無関係に、人は制度化された価値を、将来の豊かな社会のためであるとして信じるようになるのである。このことをイリイチは、二〇世紀以前の教会が成し得てきた行為だとし、二〇世紀以降では、学校が教会の役割を取って代わったとする教会と学校の類似性について言及した。ただし、ここでの将来のための豊かな社会は「逆方向のことを生じさせるような条件」を生じさせてしまい、個人では対応できないリスクが孕むこととなる [Illich 1971: 2]。そのため、1960年から1970年代のイリイチ（報告者はこの時期のイリイチを前期イリイチとする）は、豊かな社会を信じる制度として学校の存在を批判したのである。

前期イリイチの課題の一つに、知識の詰め込みを基本とする学校教育の困難と学歴や資格取得者有利の状況が、無学歴者のみならず高学歴者にとってもまた不安を煽るものだと問題にしていた。しかし、イリイチは1990年代（報告者はこの時期のイリイチを後期イリイチとする）になると、批判の対象は学校制度に留まらず、教育全般へと批判の射程を広げることとなる。イリイチによると教育には、近代に表出した「certitude」の起源が関連し、西洋の中で想像力は三つの主要な変化があるのだと言及した。主要な変化とは、文字、ページ、スクリーンが順に普及していくことによる、読み手の精神の変化のことである。このことは、音声から文字、そして本から電子媒体といった言語や媒体の変化と関連してくる。そして、教育が様々な異なる形態として、近代社会のなかで実施されていると理解したイリイチは、批判の焦点を学校化から学習へと移したのである。後期イリイチは、教育のニーズや生涯学習といったライフスタイルがあらゆる生活の場で、人々を学習へと駆り立てる社会として蔓延することを批判するのである。報告者は、イリイチのいう偶然性の下で、世界に遍在化した教育の永続性に焦点を置きつつ、教育によって横領した学習の変遷が、一方でイリイチが主張した、人々の学習における自由な出会いとなる偶然性について、イリイチの神学的議論から検討する。

【参考文献】

- ・ Illich-Ivan, 1970, *Deschooling Society*, Boston: Marrison Boyars. (=1977, 東洋・小澤周三訳『脱学校の社会』, 東京創元社.)
- ・ ———, 1986, *A Plea for Research on Lay Literacy*, Interchange (The Ontario Institute for Studies in Education), vol. 18, Nos. 1/2 (Spring/Summer 1987). (=1991=1999, 桜井直文監訳, 「レイ・リテラシー」『生きる思想——反=教育/技術/生命』所収, 藤原書店.)
- ・ ———, 2005, *The Rivers North of the Future. The Testament of Ivan Illich*, House of Anansi Press. (=2006, 白井隆一郎訳『生きる希望——イバン・イリイチの遺言』, 藤原書店.)